

季刊 連句 第22号



連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

再版 B6判
三五二頁
三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使え
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二二〇〇円
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとられず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円
季語辞典

日本の季節にまつわる言葉をスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一九〇〇円

国語慣用句大辞典 A5 六〇〇円

国語慣用句辞典 B5 二二〇〇円

国語史辞典 B5 三〇〇円

日本語語源辞典 B5 一八〇〇円

京都辞書典 B5 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 B5 一五〇〇円

隠語辞典 B5 一五〇〇円

近世上方語辞典 A5 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 B5 一三〇〇円

明治新語俗語辞典 B5 一三〇〇円

難訓辞典 B5 一三〇〇円

名乗辞典 B5 一三〇〇円

名数数詞辞典 B5 一三〇〇円

あいさつ語辞典 B5 一三〇〇円

新版 ことば遊び辞典 B5 一三〇〇円

類語辞典 B5 一三〇〇円

類義語辞典 B5 一三〇〇円

表現類語辞典 B5 一三〇〇円

新版 文章表現辞典 B5 一三〇〇円

101東京都千代田区神田錦町3-7

東京堂出版

電話03-233-3741~2

志の人・故瓢左先生（南柏雑記 20）	1
句の作り方	三好龍肝 2
『冬の日』の難句 — 越の独活菫	佐藤廣幸 4
「鶯の羽も」の巻 鑑賞（I）	東明雅 8
沙羅の会 歌仙三巻 捌 杉江杉亭・中島啓世・東明雅	10
（余興二十韻 二巻）	
連句季寄せアンケート	小林しげと・馬場彬風・氏原正雄 14
杉江杉亭・式田和子・福井隆秀	
「蓑虫」付勝練習二十韻	18
第二十六回 猫蓑会 歌仙六巻	
捌 桜井天留子・中田あかり・中島啓世 20	
豊田好敏・杉江杉亭・秋元正江	
興流連句会 歌仙 ほととぎす	（膝送り） 24
四宮連句会 歌仙二巻 鮎の腸・青梅雨	（膝送り）
連句懇話会全国大会 歌仙 涼しさの	捌 原田千町 26
柏連句会 歌仙二巻	捌 東明雅・下鉢清子
俳諧連歌 歌仙 朴散華	捌 東明雅 28
雁帛往来・連句会案内	29

表紙（昇り龍） 宮崎 龍火子

志の人・故瓢左先生

南柏雑記 20

雅

連句界の耆宿であった清水瓢左先生が五月二十五日逝去された。享年九十歳。

信州松本から出ている俳誌「龍胆」の一四一号（昭和四十五年六月発行）に、瓢左先生の筆になる「根津芦丈先生三回忌」の一文がある。それを読み返すと、瓢左先生がその亡き師を憶われる情の篤さと、連句の将来を思われる熱情とに胸を打たれる。この二つは瓢左先生九十年の生涯を貫く憶いであり、生甲斐でもあったのだ。

芦丈師が昭和四十三年二月歿られるや、瓢左先生は中心となって俳諧葬を執行され、四十五年四月には私たちと共に催で、三回忌を松本で営まれ、「芋日記」という追善集を刊行された。五年忌には追善集「此の一年」を独力で刊行され、同五十年の七回忌は松代で、小山松三・小林光雨・湯本牧人の各氏、私も加えて芦丈句碑を建立され、ついで五十五年の十三回忌を相州片瀬の龍口寺で修され、翌年追善集「踏青余韻」を出版された。さらに五十九年の十七回忌は、宮脇昌三氏とともに施主となり、東京神楽坂真清浄寺で追善会を執行された。

瓢左先生は昭和十三年に入門されたから、師弟の関係を結んで三十年の深い契りとは言え、このように師を尚び、師を慕い、没後の追善供養を立派に果たしたものはない。近頃稀なる美談である。

そして、この師を憶う瓢左先生の胸中には、いつも連句の前途を憂い、発展を願う気持がみちていた。先に述べた「根津芦丈先生三回忌」の文章中、昭和の俳諧評論家として随一の誉のあった故天野雨山を、その病中に訪われ、その時の雨山の言として、「芦丈先生は蕉風俳諧最後の一人だ、この人の生命の終る時、蕉風俳諧はこの世から消えてなくなる。あれだけの人は再度出現しないであろう。然し、先生はお達者であるから、その御健在中先生の薰陶により斯道を得る人が現われるれば格別であるとの一挿話があった」と述べられ、最後に、「先生の葬送より今日まで蕉風最後の人に対する禮を尽した。然し、先生が蕉風最後の人ならば、先生は蕉風を滅した罪人となり、門人はこれがかたうどとなる。我々は断じてこれを雲煙過眼視は出来ない。勇往精進、止暇断眠、以て蕉風の存続をはかり、雨山の言を反古たらしむるこそ、先生の靈を安ずる唯一の道なれと痛感した」と、しめくくっておられる。

近ごろ、連句は一応復活したとは言え、まだ隆盛というまでには到っていない。瓢左先生のこの烈々たる志を継いで、「雨山の言」を反古たらしめるよう、つとめたいと思う。

句の作り方

三好龍肝

この句とは発句、立句または俳句ではなく、連句の付句のことである。現場での私の手段を披露しようといふのが目的である。

連句に限らずどんな道でも秘伝口伝といふものがあり、それは授かるものではなく盗むものだ、と教へられたものである。私は僧侶と連句と二人の師に恵まれたが、両師とも同じことを言っていた。それでも連句の師清水瓢左は折にふれて「これは口伝だ」と言ひ、良師に就かねば連句は上達せぬと広言してゐたものである。

その口伝の一つに「よく離れた」といふ誉めことばがある。これは芦丈先生以前の宗匠たちが使つてゐた言葉だ」といふのがある。私は不幸にして芦丈にお目通り願つたこととはないが、その口癖は「翁の心法」ださうだが、この心法こそが「よく離れた」になるのだと私は理解してゐる。心法とは、前進あるのみにして三句めの転じを心がけよといふことである。翁は制約を超越することはあつても、扉にもならず変化進展を心がけてゐる、と『山襖』に芦丈は説いてゐる。これについては瓢左も「市中の」の草むら……のあたりは植物三句にはならずであつて翁を読む時は、

この様なおとし穴があるのだと警めてくれたものである。余談ながら、このくだりの四句について明雅先生は暁台説を苦しい、こゝで花を出したのがよかつたと本誌16、17号で説いてゐる。

芦丈、瓢左の説即ち芭蕉の心法と心得てゐる私の句作りの基本は三句の転じである。これさへ守れば多少の格外も許され逃がれることが出来る。三句の転じとは「離れる」ことである。

たとえ芭蕉は句ひだ、移りだやれ響きだと説いたところでも、それを一つ一つ現場で忠実に、前後左右を見渡して完全に翁の心法通りの句が吐けるか、となれば先づは無理であらうことは先刻承知の介である。

連句の座というものは静寂であると共に談笑の場でもある。とても翁の心法に気を配る余裕はないし、前句に対する応酬にヨロヨロするだけのものである。その一例を次に

孫二人雛のあられをわかちあひ

鳴音も高き籠の鶯

と新味はないがまづは無難に受けたのだが、

観音の裏の置屋の花明り

と浅草の花街を持つてきた。これでは雛飾りも鶯の籠も置屋でのこととなり、場面は逆である。若左両師はこの処を「門があつて家がある。家があつて門があるのではない」と常に教へてゐた。つまり順序を正せといふ訳である。これを避けるには「三句の転じ」を守ればいいのである。

観音の裏の花街も花明り

なれば其場か其時節と転じることが出来る。さらに次は、

ちびた駒下駄響く足音

と訳の分らぬ句がついた。鶯の鳴音の打越に響く足音と御丁寧にも、鳴り物、を連続させてゐる。三句の眺めの教を守ればこんな愚句を吐かなかつたらうにと……

ちびた駒下駄編の前垂れ

なれば音も避けられ、花街の雰囲気も少しは出てゐる。ここに挙げた例に見られる様なベタ付が主流との傾向が見られるのは嘆かましい。乍失礼、サンブルに採つたのは某巻の一部だが、作者達のこれからの精進を望みたい。

三句の転じが、一卷進行にどれほど大切なことかは、この二句の例でわかつてもらへたものと思ふ。三句の転じが成功、いやスムーズに進んだ例を挙げてみよう。

夏来れば河童が馬をさらふ淵

見事な句である。馬をさらふ、で緊張感がみなぎり、民話と現場が一致してゐる。

竹垣の下蚯蚓8の字

と其場をあつさり付けてゐる。次は花の座である。前句

までは自自場場と続き、こゝは人情のある、つまり起情の句がほしいところである。しかし、花ともなれば安易な句は考へものである。

長安の花見る事が願ひなり

長安の花とひきしまった語を句頭に置いたあたりは作者の方であらう。前句の、或ひは打越の場に近いやうでゐながら全く離れた、いはば長安といふ俤で前二句をかはしてゐる。このような句作りが「よく離れた」と言ふのではなからうか。また、こんな例もある。

小町の恋を伝へたる井戸

藍染の質屋の暖簾のはたはたと

と其場のベタ付に

アルコホールの切れし鬱病

アルコホールと小町とどこに糸がつながるだらう。これも完全に離れてゐる。

句の作り様には『寂菜』など多くの参考書がある。しかし、どれも結局は「三句の転じ」であり「よく離れた」に落着いてゐる。句作りと言っても特別な秘伝口伝がある訳ではなく、この芦丈、瓢左等の言ふ芭蕉の心法を守ることには尽きるのである。

私が、現場で心がけてゐる一端を披露したが、要は、十卷一ト稽古、百巻でやや眼が開けると言はれるやうに、ひたすら連句になつむことである。

『冬の日』の難句―越の独活茹

佐藤 廣幸

『冬の日』には、怪奇、幻想味に溢れた句がかなりあり、それが鑑賞者を浪漫の世界に誘う反面、近寄りにくい障壁ともなっている。蕉風は談林や虚栗の過渡期を経て、ようやく熟成してくるが、『冬の日』の中には、まだ過去の残滓を色濃く残した、狷介、奇抜を好む気風が横溢している。それが鑑賞者の理解をさまたげる大きな要因となっている。『冬の日』五歌仙の一つ、「はつ雪の巻」の名残の裏の次の一連は、右の意味で最も『冬の日』らしい難解な特色を備えている。

杖より硯をひらき山かげに

ち3

芭蕉

杜國

重五

荷兮

三ヶの花鸚鵡尾ながの鳥いくさ

しらかみいさむ越の独活茹

荷兮

先学の説を吟味しながら、私なりにこの一連の解説を試みようと思う。先ず杜國の付句から始めよう。向うの山かげに見える人影は誰であろうか。よく目をこらして見ると、ひとりとは典侍の局か、それとも内侍か。と見定めようとする

る句である。これは『平家物語』の中でも最も有名な「大原御幸」の面影付であることは、俳諧を志すほどの者なら誰もが容易に推測がつく筈の付けである。そういう意味ではこの付句は決して難解な句とは云えない。典侍の局は平重衡の北の方、内侍は信西の娘で、阿波の内侍とも呼ばれ、共に壇の浦で滅亡した平家一門の菩提を弔うため、洛北の大原の寂光院に隠棲した建礼門院（清盛の娘・安德帝の生母）に仕える上臈である。

重五の付句は、この杜國の前句の上臈から連想が、王朝華やかな宮中の女官達の見守る三月三日の鶏合せに飛んだのであろうか。或はまた、重五は杜國の前句を相撲風の呼び出しの名と見て、片や典侍の局、片や某の内侍という女性らしい呼び名から、それにふさわしい古社の神事の鶏合せと見立てて付けたものとも見られる。何れの場合も、単なる鶏合せを付けたのでは曲がないので、相對する鳥として、鸚鵡と尾長という珍鳥を登場させて前句に応じた。俳諧はこうした虚構を楽しむ文芸でもあった。後者の立場からする、重五の付句の解釈では、和歌森太郎氏が注目すべき新説を出している（芭蕉の本5、『歌仙の世界』所収「生

活の俳諧』。この新説に従えば、この付句の鶏合せは宮廷行事ではなく、尾張の津島神社に伝わる旧三月三日の『冬の日』の地元の津島神社鶏合せのパロディーであるという。尾張の連衆には親しい津島神社の神事を背景にした句という解釈である。私は宮中鶏合せ説よりも寧ろこの古社の神事説に惹かれる。鶏合せを神事として伝承する神社は尾張の津島神社のみならず、今日でも和歌山などに残っている。そうした古い伝承があることからこの新説は無視できない。

このあたりまでは、どうか各作者の意図も分かるし、付筋の糸もたぐれるが、荷兮の挙句となると、前句にどう応じたのか、また一句自体何を意味するのか全く五里霧中をゆくようで、戸惑いを隠し得ない。古註、新註を問わず、この挙句には手古摺っている。

先ず、古註の代表として、何丸や晝台も引用する鶯笠説を紹介しておこう。鶯笠によれば、むかし羽越地方に白髪明神と独活刈明神の二神がいて、互に仲が悪く、この二神が争えば天候は荒れ、その地方の作物は不作となった。白髪神は独活が好きで、独活刈の神はこれを喜び、独活を白髪神に献じた。白髪神はこれを喜び、静和な日が続いた。この伝承から三月三日を祭日として、その地方の人々は白髪神の社前に独活を供えた。これを怠った年は、天候が荒れ、作物はとれなかった。これが越の独活刈の神事のいわれであるという。

この荷兮の句も、この神事に基き、白髪明神が勇ましく

独活刈明神の軍に立ち向うところをいったのだと解し、前句の「鳥いくさ」に対し、「神いくさ」を付けたのだと説く。如何に辺境の地の神々の話とはいえ、神の名も、そのいくさの話も少し出来すぎていて、不自然さをぬぐいえない。鶯笠説は細部にも不審な点が多く、頭から信用することはできない。

この鶯笠説に対して、『冬の日註解』の升六説の方が比較的穩当に見える。升六は、

爰には禁裏に其國々の産物を貢奉る体を附たり。越の独活刈は貢ぎ越スの熟語なるべし。是挙句なれば祝言になして聖代のさまを附たり。しらかみいさむとは白髪のお翁も悦びて貢を奉るとなるべし。万民聖徳に懐きたるいと目出たき御代なりといふべし。

と説く。新註では、この升六説に依ったのが幸田露伴説である。露伴は升六の貢進説を補強するため、『延喜式』の記事を援用し、独活に関する和漢の本草学の知識を引用し、自説のガードを堅めている。荷兮がいくら故事好きといえ、延喜式や本草学の知識によりこの付句を創ったと見ることは到底できない。露伴学人の評釈は、自己の学識に溺れた独り角力としか言いようがない。私は寧ろ、鶯笠説の中にこの句を説明する手掛りがかくされているのではあるまいかと思う。というのは、荷兮が前句を古い神事の鶏合せと見て、それに対応する虚構の神事を付けて前句に応

じたと見られるからである。その意味で、私は升六説よりも篤笠説の方に惹かれるものを感じる。

日本民俗学の創始者、柳田國男翁は夙くから、この句を下関の和布刈の神事から想を得たのではないかと卓見を抱かれていた。柳田翁のこの考えは、中山太郎氏の「独活刈の神事」という論考（昭和五年、大岡山書店刊『日本民俗学』神事篇所収）の中に、はっきり記されている。中山氏が「K先生の考説」として右論考の中で紹介するのが、柳田翁のこの句に対する考えである。中山氏のこの本は、現在では知る人も少なく、見るのも困難な本になっているので、その条を左記に紹介しておく。

K先生の考説。私（中山太郎氏）は先日K先生（柳田國男先生）を訪ねて、この句に就いて高見を伺ったところ大略左の如く語られた。全体、連句の面白味といふものは、付合っている者同士の間に限られたもので、他人が読んだり解釈したりしたところで、到底作句者自身達が味ふだけの興味が湧くものではない。従って連句には、其の場限りの趣向や、其の人々だけの思ひ付きなどが旺んに用ゐられるものである。そしてかゝる例證は芭蕉の七部集だけを見ても随処に指摘することが出来るのである。此の立場から見ても、越の独活刈といふ神事の如きは荷今の創作と認むべきものであって、それを何丸の如く、吹浦の云々と考證するに至っては、その迂濶さに驚かされるのであって、独活刈の神事を行ふ神社があるなどと

柳田翁は露伴説に敢て異を唱えることをいさぎよしとせず、避けて通られているが、その主張するところは明確にされている。この柳田説とは別の角度から、故伊藤正雄先生もこの荷今の挙句を門司の早鞆明神の和布刈の神事のパロディーと受け取り次の様な解釈を下している。

前句の如き鸚鵡尾ながの鳥いくさも、花の都あたりに
は実在するものと仮定し、同じころ北陸地方では、独活刈の神事といふ独自の行事が催されるものと想像した対付けであらう。けだし九州門司の早鞆明神には、古来有名な和布刈の神事があり、大晦日の夜、神宮が早鞆の瀬戸（関門海峡）の和布を刈取り、元旦神に供へる。この神事がすむまでは、付近の漁民は和布を採らぬ習慣になつてゐる。そこでこの海辺の和布刈の神事と対照的に、越路の山国らしい独活刈の神事なるものを想定し、春光漸く北地にも遍き折柄、寒さに弱い老人たちも勇み立って、この神事にいそしむ体を付けたのであらう。（『芭蕉連句全解』昭和五十一年刊）

右の様に伊藤説が、越の独活刈を古い伝統に基づく和布刈の神事のパロディーであるという、柳田説と同一の結論に到達したことは一見不思議に思われるが、私の見るところでは、伊藤説が柳田説を予め承知してこれに同調したものとと思われず、伊藤説は独自の調査によって導き出された、全くの偶然の一致だと思われる。尤も生前の伊藤

いふことこそ実に眉唾ものである。誰も知ってゐる下関の和布刈の神事——正月元朝に生えてゐる和布を、神宮が松明を振りながら刈るといふ、神秘的な伝説は、荷今等俳人の好奇心をそそるに充分なものであったに相違ない。既に和布刈神事がある。それを独活刈ともちって見るのも一趣向だらうのところ、創作したに過ぎぬのである。それ故に、奥州にも、越後にも、更に越中にも、越前にも独活刈の神事が行はれたといふ話も聞かなければ、記録も見ぬではないか。これらは幾ら詮索しても、そんな神事は永久に発見されぬことと思ふ。

驚くほどの洞察力と自信にみちた発言である。柳田翁は別のところで、この荷今の挙句について、次のような見解を書きのこしている。併せて読めば柳田翁のこの句についての考えは明白である。

今でも何かにそういう事実（篤笠説を指す）があるという者があるが、私にはまったくの作り事としか思われ
ない。……爺の独活刈なども原因は是とよく似てゐる。
一方に弥生の節供の鶏合せのかわりに、鸚鵡を出された
というような思ひ切った趣向ができると、是に立向うた
めにはどうしてもまた一段と頓狂な空想が浮んで来ずには
おられなかつた（『木綿以前の事』所収「山伏と島流
し」）。

先生を存じ上げている私は、先生が迷ふことなくこの句を、早鞆明神の和布刈の神事のパロディーと見抜かれたのは、戦前の神道の総本山ともいふべき伊勢の神宮皇学館が敗戦により解体されるまで勤務されたキャリヤーにもよるが、また、和布刈の神事が謡曲『和布刈』によつてもよく知られた伝統あるユニークな神事であつたことにもよるので、その一致は何ら不思議なこととは思われない。

この荷今の挙句を和布刈の神事のパロディーと解すると、前句を尾張の津島神社の鶏合せの神事のパロディーとする和歌森太郎説が俄然注目されてくる。即ち前句の珍鳥によるフィクションの鶏合せの神事に對し、これまた、フィクションの越の独活刈の神事に對し、ことなるからである。尚、「和布刈神事」についての詳しい解説は五来重氏の論考に譲りたいが、私はこの解説を読んで、和布刈神事をパロディー化した、荷今の「越の独活刈」の句が挙句にふさわしい祝意を含んだ句であることがようやく理解できるような気持になった。

和布を神聖視するのは、海岸にながれ寄る海藻は「常世」から寄り来る霊のこもれるものであり、したがって海神の宮からの贈物とする古代信仰があつて、和布刈神事になったものと推定される。『統仏教と民俗』所収「年中行事と民俗」昭和五十四年刊角川選書）

特にこの五来氏の一節が私の印象に強く残っている。

「鳶の羽も」の巻 鑑賞（I）

東 明 雅

猿蓑の四歌仙のうち、「市中は」の巻の鑑賞が前号で終ったので、今回からは同じ猿蓑の「巻」の巻を鑑賞してみたい。

この巻は芭蕉と去来・凡兆の三人に史邦を加えての四吟歌仙である。史邦は中村氏。尾張犬山の藩医であったが、貞享のころ致仕して上洛、芭蕉やその弟子たちと親しかった。のち江戸に下り没年不詳。

元禄三年（一六九〇）七月、幻住庵を住みすてた芭蕉は湖南・京都で生活し、九月二十八日伊賀に帰った。しかし、年末にはまた京へ戻り、翌四年の春は再び湖南で迎えていく。だから、本歌仙の成立を元禄三年九月二十八日以前とみる説（阿部正美氏・「芭蕉伝記考説」）もあるが、いかたかである。先に講じた「市中は」の巻より後にできたことは確実であるが、この猿蓑という書が、発句の部巻一の巻頭に「初しぐれ猿も小猿をほしげ也 芭蕉」を置き、書名もこれに由来しているもので、連句の部巻五でも、初しぐれに因んだこの「鳶の羽も」の巻が巻頭に出されているのである。

鳶の羽もカゲロ刷ぬはつしぐれ

（初冬。初時雨。人情無）

去来

刷は「かいつくろふ」と訓み、「かきつくろふ」の音便であり、「掻き繕ふ」の意である。この語はもともと他動詞であるから、純粹にその点を強調すると「何が何を刷ふ」のか、はっきり説明しなければならぬ。その点、たとえば山田孝雄氏ははっきりと、「鳶が羽を刷っている」（続々芭蕉俳諧研究）と解釈され、これと同じような意見の人は多い。山田氏の説は「刷ふ」という語が、和漢朗詠集その他の古典で、鳥の動作をのべる事に用いられる例が多いところにその根拠がある。

これに対して、「はつしぐれ」が鳶の羽を刷ふのだと見る説があり、同じ「続々芭蕉俳諧研究」で小宮豊隆氏が提唱しておられる。即ち、鳶のような佗びや寂びから遠い鳥でも、「はつしぐれ」の為に佗びや寂びが出てくる、その状態を叙したものとする説である。

さらに、「続々芭蕉俳諧研究」の中で岡崎義恵氏は、「羽がおのづから刷はれてゐる、それ自身装ひを整へたといふ自動的な意味に用ゐることは出来ないでしょうか」と発言さ

れた。

この岡崎説を継承して、最も明快に説いたのは杉浦正一郎氏で、「いつもけばだちし鳶の羽が時雨に濡れて美しくおさまりの意。羽が主になる故『羽も』と言へり。刷は自動詞。鳶の羽も自らと、のひたりと云。かゝる異法は俳諧には許さる。先注の如く、鳶の嘴にて翼をなでつくるとならば涼俗説の如く『鳶も羽を』とあるべし」（新注猿蓑）と言っている。

右の諸説、いずれも碩学の説だけに傾聴に値するところが多い。しかし、「刷ふ」という語がどういう行動をさすか具体的に説明しているものはない。これについて、「滑稽雑談」（正徳三年序）巻之八、一七「毛をかふる鷹」の項に、「或鷹匠の物語に、春のすゑより夏に至て、鷹の毛落て後、鳥屋籠の中、油を塗るといふ事待る、鷹の尾筒の上の方に、膏壺とて羽の下に坳あり、此所へ身の膏が満ると也、此膏を己が嘴にて毛の落たるに塗れば、もとのごとく毛を生ずると也。総て外の時にても、はたきて羽の毛そくけたるに、かの膏を嘴にてぬりて、毛を刷ふと也」と出ているのが参考になろう。また同書巻之十二、「鷹羽遣ひをならふ」の項に、「鳥屋人と云、おほくは四月八日也。季夏の頃、羽を刷て物を撃んの氣生ずるならし」とあるのも注目すべきである。もちろん、鳶は鷹と違って、鳥屋人（換羽の間、鷹部屋で放し飼すること）もないが、同じワシタカ科の鳥であり、同じように、春に換羽をはじめて秋に終るのである。「滑稽雑談」にいう膏壺をもっているこ

とも同じである。

右のように「刷ふ」という語が、鳥類の特殊な行動であることが分かった以上、やはりそのように解釈すべきではなからうか。

鳶は猛禽類と言っても、人里に近く群れ、また死んだ魚や腐った魚を餌にしている為か、驚や鷹よりは一段低く評価されている。仮名草子「竹斎」に、主人公竹斎のみすぼらしい姿を「綴紙子に紙頭巾とりさがしたる姿にて、さながら、鳶が身ぶるひして風に吹かれし如くなり」と述べているのは、有名な「冬の日」の芭蕉の発句、「狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉」の典拠であるが、かたがた、この時代、あるいは芭蕉の一座における鳶というものに対する通念をうかがわせるに十分である。その平素はみすぼらしい姿をしている鳶も、換羽を全く終って冬に入り、初時雨がさっと通りすぎるころは、高い樹の上で、羽を刷っているその姿も、見違えたように、しみじみと眺められるというのであろう。

「付合てびき蔓」（天明六年成）に凡菫が「発句初しぐれは題にて、鳶は趣向の取あはせ也。扱かいつくろふ羽とせしが句作也」と言っている通り、初時雨という題に対して、和歌や連歌などではあまり取り上げられない鳶を取りあわせ、また、その取りあわせるのに「刷ふ」という言葉を発見し、使ったのがこの句の成功の原因であった。初時雨と鳶とだけでは詩にならない。「刷ふ」という語で鳶が初時雨の余情に合うようになるのである。

樟若葉

杉江杉亭 捌

彫り深き碑面の文字や樟若葉
五月の風の吹き抜くる街
ティーテーブル客の支度のととのひて
仕舞ひ忘れしSPレコード
上弦の空を指さす子らの声
初鴨早やも渡りくる湖
遠野路の民話を囲みぬく酒
女剣劇座長妖艶
若き日の過ちふつと思ひ出し
双手ひろぐるキリストの像
ボンベイの廢墟の隅に黒き猫
どんとぶつかる掏摸に謝る
寒の月身すぎ世すぎの曳き屋台
頬被りして今日も定刻
減税はお題目だけ勤め人
様変りするパートタイマー
車椅子花の大枝押しくぐり
草餅の香の指にほのかに

杉亭 正雄 千哲 弘子 天留子 哲 町 哲 雄 留 町 弘 雄 弘 同 町 留 町 雄 留

春の雷天帝何を叫べるや
アフガン退去恙無からん
隅田川舟の下りは十の橋
稽古三味線洩るる横町
どことなく舌つ足らずの耳年増
プールサイドで見せるハイレグ
「蛭」てふ名のゼリー菓子別れの日
地蔵和讃の声が揃はず
和綴本端につきたるめくれ癖
大入道の目玉ぎよるぎよる
月天心南を指せる機内にて
茸狩りせし過疎のふるさと
葛紅葉先の先まで紅葉せる
増築の宿白き外壁
世渡りと学のあるなし別のこと
下萌踏んで岡にのぼりぬ
小手かざし仰ぎて見やる花の雲
互ひ違ひに蝶々の舞ひ

留亭 弘町 哲雄 弘哲 留町 哲町 哲町 哲留 雄町

桐咲けり

中島啓世 捌

山裾のひと塊染めて桐咲けり
溪川の奥鮎の釣人
ハンモック嬰兒ひとと眠らん
パウンドケーキふつくと焼き
月浴びて持ち重りせし稀観本
虫の音しきり庭の叢
烏瓜真赤に熟れしを手渡され
恋してしまふ同母兄妹
アパートの誰も知らない新婚さん
手作り爆弾部屋でこっそり
親善の船の哀れや暁の火事
寒月照らす岩を打つ波
大観も天心も亦朦朧体
雀二三羽餌を撒きやる
朝の作務すみてしづかな方丈に
株買へといふ電話いくたび
花の中パイプオルガン甦り
バンド転んで今日もうららかに

啓世 彬風 麻子 淳子 正江 久美子 淳江 美江 風 淳 麻 江 美 風 麻 江 麻

春の風邪葛根湯を煎じつつ
職にもつかず耽ける哲学
駄菓子屋のソース煎餅ガラス壺
橋のかかりて島のにぎはふ
はりえんじゅ咲きたる道を犬連れて
浴衣まとひし女と目の合ひ
早業に二分の一秒盗むキス
親子代々掏摸のジプシー
酔ひつづれ巴里の駅でねむりこけ
修道院の鬘冷ゆ
狭き門叩く若者月今宵
鳴高鳴きて創刊号出す
相続税非課税の分倍増に
オールドラングザイン流るる
手抜き主婦夕餉は又もてんや物
生返事して煙草ぶかりと
花びらを車につけて信濃路を
土間いっぱい扇干される

淳美 江風 風 淳 麻 美 風 麻 江 美 淳

連句季寄せアンケータ

前略

連句を巻く場合、手元になくはならぬものは季寄せ（歳時記）であります。私どもは山本健吉編の季寄せ（文芸春秋社）を愛用しておりますが、それはこの季寄せが春夏秋冬のそれぞれ三月にわたるものと、初・仲・晩の区別をはっきり付けて季語を掲出している為でありまして、俳句と違つて連句では、この区別が一番重要だからであります。

しかし、この季寄せは春夏と秋冬の二冊に分かれており、取扱いにやや不便であるとともに、内容的にもいろいろ問題がないわけではありません。

それで、私どもは新しく便利な連句の季寄せを作ろうと考えております。

皆様におかれましては従来の季寄せに対する御感想なり、新しいものに対する御希望なりを卒直にお聞かせいただき、私どもこのこれからの作業に対する示唆を与えてい

ただければ甚だ幸いと存する次第でございます。何卒よろしくお願い申し上げます。

六月十五日

東 明 雅
外

各位様

◆分身の条件

小林しげと

歳時記は例えば適宜な季語を拾いたい、既に月次の月等が出たため定座で月の異名を知りたい、付合いの季語が逆戻りしないように付句の季語を按配したい等々のため不可欠です。また盛夏に極寒の句を作るとき実感が湧かず困惑することがままあります。前句に付き難くて工夫の糸が纏れ落着かないときでも頼りになるのが歳時記です。俳句歳時記を利用していた連句作者は早く

から連句歳時記を待望しておりました。前年『連句歳時記』が出て好評を博しましたが、それとは別に新しい連句歳時記がもし編まれるならば凡そ次のような考慮が払われたら幸甚です。

- 一、体裁 携帯の軽便性（新書版サイズの季寄せ式）表紙は堅牢、活字は8乃至9ポイント程度。インディアン紙使用。
- 二、代価 学生、主婦、高令者にも入手し易いように廉価であること。
- 三、内容

(一) 季語 三（春・夏・秋・冬）及び初（仲・晩）を区別する。

歌仙一巻を例示し参考に供する。

(二) 項目 現行俳句歳時記同様に時候・天文・地理・生活・行事・動物等を分類し実用の便を図る。

(三) その他 夏秋冬の正花、恋、観想等の詞の一覧の作成。

(四) 用例 古今（元禄期・中興期・明

治大正昭和）の作例を撰採、また三句転を見渡せるようにする。

四 記述 平易簡明のこと。

四 索引 季節別・五十音順の索引を付す。四、附録 俳句とは異つた視点で連句歳時記の特徴、用法について解説を行う。

使つて便利、読んで楽しい歳時記、連句はこれ一冊で十分という歳時記こそ連句実作者の分身の条件ではないでしょうか。

◆新連句季寄せに就いて

馬場彬風

待望のこと愈々御着手の由大慶至極に存じます。さて「希望を申せ」との有難き御意。然し「現在の季寄せは俳句の為のもの」連句作者なら誰でも感じている「不便さ」と問題点。

私見として更に申し添うべき事があるかと存じますが、既に満四年近く、四十巻を巻いた興流連句会の連衆の意見も集約し、左記いたしました。ご参考になれば幸いです。

(一)従来の季を四つに分類している分け方はそのままよいかと存じますが、例えば

三春はよいとして初春から仲春に通ずる季語、仲春のみの季語、仲春から晩春へ、又晩春のみの季語があります。例えば人事で卒業、入社等、植物、動物等にも多々あります。此等をヘディングの下にでも註記できないでしょうか。

季戻りにならずに自然に続ける為です。

(二)見做しの季語。これは実作上季移り等に便利で大切なものと存じますが、例えば水盤（夏）開帳（春）等或は整理すべきものもあるかと存じます。

(三)新旧暦による季語の混乱。新年（冬）はよいとして盆、鬼灯市、七夕祭、朝顔市等は、現実には夏行う所が多い。季は秋として新暦の場合は夏の季語を添えたらよいでしょうか。新年でも「明けの春」「迎春」「新春」等は付句に冬を付けるのは少々抵抗がある。新年の句二句の次に「明けの春」等出た場合、春の句と見なして次は「一句春の句を続ければよいか等、この辺り何か取り決めが出来ないかと。

四冬の発句に新年の脇を付けるのは穩当でないと思う方もありましょう。

右の(三)(四)の問題等は付録として別に「新旧暦に関する季語の取扱い方」としてお決

め下さればと存じます。

又この機会に是非「現代正花論」をお定め下さい。中華が正花か豪華が正花か、等々です。ご指定の字数も尽きました。昭和連句の為に遺す偉業、ご成功を祈念します。

◆三つの提言

氏原正雄

連句専用の季寄せを作られるとのこと、私達にとってこれ以上の喜びはございません。意見として申上るほどのものはございませんが、気のつきました二三申述べさせていただきます。

(一)実作に於て、この季題がどの季で、且つ三、初、仲、晩のどれなのか、索引だけで判れば大変便利です。今の歳時記では、季題によって頁を繰り、やっとそれが判るので、早く知りたい時はさうくてなりません。

(二)使用の為にも、又持ち運びの為にも、歳時記は一冊であり、且つ出来るだけ小型であつて欲しいものです。その為には二段組にするとか工夫があると存じます。それには角川の合本俳句歳時記は一つの参考になるかと思ひます。

